

國學院大學学術情報リポジトリ

神奈川県三浦市方言の老年層のアクセント

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂本, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001481

神奈川県三浦市方言の老年層の アクセント

坂 本 薫

論 文 要 旨

神奈川県東南部沿岸に位置する、三浦市で生育した老年層の男性話者を対象にした調査の結果から、名詞、動詞、形容詞のアクセントについて述べる。方言区画上、三浦市方言^{みうらしほうげん}は、神奈川県南部方言の下位区分である三浦半島方言^{みうらはんとうほうげん}と、市の西部沿岸地域については相模湾沿岸方言^{さがみわんえんがんほうげん}に属する。アクセントは東京式で、n 拍の語に対して n+1 種のアクセントの型の対立がある。

話者は市内南部沿岸部で生まれ育っており、調査地点の方言の伝統的な相を保持していた。発音の面では、三浦半島方言・相模湾沿岸方言独特の特徴が両方観察された。アクセントの面でも、特に名詞と、動詞の諸形式において県内方言、および神奈川県方言に属する西関東方言のアクセント^{にしかんとうほうげんのあくせんと}の伝統的な相とみられる特徴が多く観察された。一方、形容詞については、一部の活用形には古相保持^{こそうほじ}と見られる特徴が観察されたが、県内、およびその周辺で生じている変化と共通した新しいアクセントの傾向も認められた。

1. はじめに

神奈川県三浦市方言の老年層話者に対するアクセントの調査の結果について述べる。神奈川県の方言は、俚言の蒐集と方言区画の設定に関しては豊富な先行研究があり、殊に、三浦半島の俚言については昭和初期から民俗研究家による資料が残されている。しかしながら、音声、音韻の面となると、まだその実態を明らかにする余地が残されている。

調査の結果、発音やアクセントの面で、当地域の方言の伝統的な相とみられる特徴が数多く観察された。結果の概要を以下に挙げる。

- (1) 名詞では、有力な型への変化が進んでいると言われている、3 拍中高型や 3 拍尾高型など、劣勢なアクセントの型の保持が認められる。
- (2) 多拍の名詞でも東京および周辺地域で古いと言われているアクセントが観察された。

- (3) 動詞活用形に付属語などが後続した形式のアクセント(以下、「活用形のアクセント」と呼ぶ)に多く西関東方言の伝統的なアクセントが観察された。
- (4) 形容詞は、終止形単独のアクセントや一部の活用形のアクセントに比較的变化の進んだアクセントの特徴が認められるが、伝統的な相を保持している部分もあり、新古が混在している状態である。

この論文では、まず、三浦市方言および三浦半島方言に関するこれまでの研究と調査によって得られた発音上の特徴についてまとめる。そして、調査によって得られたアクセントについて、名詞、動詞、形容詞の順に示し、それぞれの特徴について詳述する。

2. 三浦市の位置

2.1 地理的概況と産業、交通

神奈川県東南部、三浦半島の最南端に位置する、人口約4万4千人の市である。北部を横須賀市と接している。北部は農村地帯で畑作が主で、南部沿岸は江戸時代より漁港として発達した。江戸時代は天領であった。1955(昭和30)年、三崎町、南下浦町、初声村の二町一村が合併、三浦市として市制施行した。今回の調査地点である三浦市三崎は、三浦半島の南西部、相模湾沿岸に位置する地域で、市内の遠洋漁業の拠点である三崎港で知られる。

鉄道(京浜急行電鉄)が三浦市内まで延伸したのは1966(昭和41)年のことで、1975(昭和50)年、市内北西部に三崎口駅が開業するが、その後の延伸は行われず、市の中央部には乗り入れていない。以南の交通はバス路線が主となる。東京都心からの距離はおよそ60kmで、京浜急行線で品川駅～三崎口駅間の所要時間はおよそ65分である。

2.2 方言区画上の位置

全国方言の区画における位置づけとして、東條操(1954)によると、神奈川県方言は東部方言に含まれる関東方言の、さらに西関東方言に属すと述べられている。

神奈川県内の方言区画は、日野資純(1952, 1964)等で述べられている(図1)。三浦市方言は、図中(2)



図1「神奈川県方言」『現代日本語方言大辞典』より。

矢印及び点線は筆者による。

の南部方言に含まれる相模川東部方言の下位区分である三浦半島方言に属する。ただし、西部沿岸部は相模湾沿岸方言の区画にも含まれており、後述するが、本稿で述べる話者の方言は両方言の特徴を持っている。

3. 三浦半島方言の研究史

三浦半島方言の方言集で最も古いと言われているのが、民俗研究家太刀川聡司郎氏による語彙の蒐集（昭和7年ごろか）を、氏の没後、赤星直忠氏がまとめた『三浦耳袋』『三浦誌資料』（ともに日野資純編（1951）『神奈川県未刊方言資料』所収）である。この資料は編者の日野氏によってアクセントが付されている。以降の県内の主な方言調査を挙げる。1930（昭和6～7）年代初頭には山本靖民氏による初の全県的な調査が行われた（「昭和初年度調査」と言われる）。山本靖民（1933）にはその結果とともに県内で集められた俚言集が収録されている。その中には旧三浦郡のものも多く収められている。続いて、20年後の1950（昭和25）年に日野資純氏による調査（「昭和中期調査」と呼ばれる）が行われている。ここにおいて、県下の方言区画が提唱された（日野資純1952）。「三浦半島方言」も、6地点が調査地点となっており、神奈川県南部方言の一区画としてその特色が述べられている。さらに20年後、1974～1975（昭和49～50）年に『神奈川県言語地図』作成のために行われた調査（「博物館調査」と呼ばれる）が行われ、43枚の地図が作成されたが、このうち「あり（蟻）」、「堆肥」など10枚の地図が「三浦半島独立型」と分類され、この時点でも語彙の面での三浦半島方言の独自性が示されている。

4. 調査について

調査は2017年3月～7月、三浦市内で行った。話者は三浦市南部、旧三浦郡二町屋（現白石町）で生まれ育った81歳男性（調査当時）。現役時代は市内で会社員として勤務。外住歴は無い。両親ともに現三浦市域で生まれ育っている。

調査は面接式で、調査項目は名詞、動詞、形容詞とその活用形。名詞語単独と「が」「を」「に」等を付けた、もしくは助詞が脱落した文の発音を記述した。動詞と形容詞については、語単独の発音と、活用形を含む文を作成してもらい、発音してもらった。調査対象とした語は、平山輝男（1960）所収の「全国アクセント比較表」に掲載されているものが中心で、これに多拍名詞や複合動詞を加えた。

5. 調査結果と考察

5.1 方言的特徴の概観¹

調査により観察された方言的特徴を挙げる。語中語末のガ行音は規則的に鼻濁音 [ŋ] が観察された。地域的な特徴を持つ音として、[₃e] と [je] が観察された。[₃e] は、県内で使用される「～ジャン」および「～ジャンカ」に対応すると考えられる「～ジェン」「～ジェンカ」（～ではないか等の意）の形式でのみ観察される。これは三浦半島方言の特徴として、先述の『三浦誌資料』から指摘されている音である。[je] は、呼びかけや注意喚起などの意図で用いる掛け声「イエー [je:]」に現れる。こちらの音は、相模湾沿岸方言の特徴的な音として、伊豆半島東岸まで広く分布しているといわれている（『三浦誌資料』、日野資純1951など）。なお、/jai, joi/ 等が融合するときも、早い [hae:] など脱落する場合もあるが、焼いた [je:ta] など一部の語で [je] が観察された。

無声子音に挟まれた狭い母音の無声化は頻繁に生じるが、それに伴うアクセントの下がり目の移動は規則的ではなく、たとえば「吹く」[ɸɯꜜ`ku] のように無声化した拍の後に下がり目が来る発音もしばしば観察された。

連母音は [mune:ta]（胸板）や [kaŋe:ru]（考える）、[ka:]（買う）、[ae:]（青い）など、ai、ae、au、oi には融合が観察されたが、「アツイ（熱い）」「ウスイ（薄い）」など ui は融合が生じにくいようで、[kai:]（痒い）などごく少数の語にとどまった。

このほか、ヒ→シの交替 [ʃi]（日／火）、[ʃiŋamu]（ひがむ）、[ʃipparu]（引っ張る）や、動詞語末のラ行の撥音化 [toN so:da]（取るそうだ）は非常に盛んである。また、[koi]（これ）、[soi]（それ）や [deraita]（出られた）など、一部の語にレ→イの交替が観察される。

5.2 アクセントの体系

東京語のアクセント同様、アクセントの「下がり目」の有無、そしてその位置が弁別の特徴であり、その対立は n 拍の語に対して n + 1 種ある。表 1 に 3 拍語までのアクセントの体系を示した。

表1：三浦市方言のアクセントの体系

拍	音韻論的解釈	語例
1	/○/	柄、蚊、毛、子、血…
	/○/	絵、尾、木、酢、田、手、荷…
2	/○○/	飴、蟻、烏賊、梅、釘、行く、着る…
	/○○´/	石、歌、北、寺、足、鍵…
	/○´○/	斧、秋、汗、婿、夜、会う、見る、良い…
3	/○○○○/	欠伸、錨、鎖、衣、魚、机、遊ぶ、借りる…
	/○○○○´/	小豆、力、頭、扇、鏡、刀、瓦…
	/○○´○/	五つ、さざえ、油、余る、起きる、赤い、黒い…
	/○´○○/	朝日、嵐、もみじ、帰る、通る…

5.3 名詞のアクセント

先述の通り、名詞は語単独の発音に加えて、助詞付き（脱落した文も含む）の短い文の発音を観察している。東京のアクセントでは、2拍以上の尾高型の名詞に助詞「の」が接続する際、「ハナノイロガ²…（花の色が…）」のように「の」が平板に発音されると言われるが、今回の調査では言われている通り平板に発音される場合もあったが、「ウラノハタケデ…（裏の畑で…）」のように下がり目が来る場合もあった。これは3拍以上の名詞についても同様である。以下、1～3拍の語のアクセントを、類別語を中心に示す。語の類は、〈〉内にローマ数字で示した。類別語以外のものは〈表外〉としてまとめた。

(1) 1拍名詞

平板型 柄、蚊、毛、子、血、戸、帆、実、身〈Ⅰ類〉

名、葉、日、藻〈Ⅱ類〉

頭高型 世〈Ⅰ類〉、矢〈Ⅱ類〉、絵、尾、木、酢、田、手、菜、荷、根、野、火、穂、目、芽、湯、夜、輪〈Ⅲ類〉

「世」、「矢」という例外を除き、Ⅰ類、Ⅱ類に属する語に平板型、第Ⅲ類に属する語に頭高型のアクセントが観察された。頭高型へ変化しやすいと言われる「帆」は平板型が保たれていた。同様に頭高型への変化が指摘されることの多い「巢」は頭高型のアクセントであった。この方言は「スヤ」という俚言が使われる。「巢」のアクセントは後年に学んだものと考えられる。

頭高型の「手」、「荷」、「目」について、いわゆる慣用句に限り、揺れはあるものの「下がり目」を失う例が見られた。以下に例を示す。

「手が足りない」テガタリネー 「手をかける」テオカケル (テオ…とも)
 「荷が重い」ニガオモイ (ニガ…とも) 「目に付く」メニツク (メニ…とも) 等。

(2) 2拍名詞

平板型 飴、蟻、烏賊、牛、梅 [mme, umme]、枝、海老、顔、柿、風、金、壁、釜、雉、
 傷、桐、霧、釘、口、首、腰、酒、笹、里、皿、杉、鈴、裾、底、滝、竹、塵、爪、
 虎、鳥、庭、布、箱、端、鼻、羽、髭、膝、水、道〈Ⅰ類〉ウチ (家)、イソ (海
 岸の岩)、カツ (鰹)、ケブ (煙) ハナ (岬)〈表外〉

尾高型 石、岩、歌、音、紙、川、北、旅、寺、梨、夏、橋、旗、肘、冬、町、胸、村、
 雪〈Ⅱ類〉、足、網、泡、池、犬、色、腕、馬 [mma, umma]、裏、鬼、鍵、髪、
 瓶、岸、草、櫛、靴、雲 (平板型も)、倉、栗、事、竿、坂 (頭高型も)、塩、炭、
 月、土、波、縄、糠、蚤、花、骨、山、綿〈Ⅲ類〉、鰻、浜、灘 (平板型も)、余
 所〈表外〉

頭高型 斧、神〈Ⅲ類〉、跡、粟、息、糸、稲、今、臼、海、瓜、奥、帯、笠、糟、数、肩、
 鎌、絹、錐、屑、空、種、箸、針、松、麦〈Ⅳ類〉、秋、汗、雨、鮎、桶、陰、
 蜘蛛、声、猿、露、鶴、春、鮒、窓、婿、夜〈Ⅴ類〉モヤ (霧)〈表外〉

Ⅰ類に属する語に平板型、Ⅱ、Ⅲ類に尾高型、Ⅳ、Ⅴ類に頭高型のアクセントが観察された。例外として、Ⅲ類の「斧」「神」に頭高型のアクセントが観察された。Ⅲ類「雲」については、特に語単独の発音に、新しいと言われる頭高型との揺れがみられるものの、伝統的な尾高型のアクセントが観察された。「神」は、すでに新しい頭高型への移行が認められた。ちなみに、複合語「神様」のアクセントはカミサマであり、「神」の尾高型のアクセントの痕跡を思わせる。なお、「坂」も頭高型と尾高型との揺れが観察されている。

(3) 3拍名詞

平板型 欠伸、筏、錨、田舎、鯛、飾り、霞、形、着物、鎖、轡、車、氷、衣、魚、姑、印、
 使い、机、隣、膠、寝言、初め、鼻血、庇、額、羊、南、都、昔、鎧〈Ⅰ類〉、間、
 桜、扉、百足〈Ⅱ類〉、黄金、二十歳〈Ⅲ類〉、畑〈Ⅳ類〉、鰈 (平板型も)、簾〈Ⅴ
 類〉、兎、鰻、狐、雀、背中、鼠、裸、雲雀、誠、操、蚯蚓〈Ⅵ類〉、後ろ、鯨、薬、
 盥〈Ⅶ類〉、ウグイ、桶屋、親父 (平板型も)、南瓜、蜜柑 (頭高型も)〈表外〉

尾高型 麓 (平板型も)〈Ⅰ類〉、小豆、毛抜き、釣瓶、蜥蜴、二つ、二人、夕べ [jumbe]
 〈Ⅱ類〉、力、頭、馳、恨み、扇、男、面、女、鏡、仇、刀、瓦、拳、暦、宝、袴、

鋏、林、光、東（平板型も）、響き、袋、仏、筵〈Ⅳ類〉、櫛〈Ⅴ類〉、椿〈Ⅶ類〉、鱗、かじめ、シグレ（にわか雨）、海月、豆腐、ムジナ（狸）、ハガチ（百足）〈表外〉

中高型 小麦、栄螺〈Ⅲ類〉、五つ、思い、境〈Ⅳ類〉、油、命（頭高型も）、心、姿（頭高型も）、涙（頭高型も）、柱、枕（頭高型も）、眼（頭高型も）〈Ⅴ類〉、苺（平板型、尾高型も）従兄、コケラ（鱗）、日傘、ひじき、火鉢、マミヤ（眉）、若芽〈表外〉

頭高型 髻、緑〈Ⅱ類〉、岬〈Ⅲ類〉、嵐、紅葉、蕨〈Ⅳ類〉、朝日、胡瓜、石榴、錦〈Ⅴ類〉、烏、高さ、狸〈Ⅵ類〉、蚕、兜、便り、病〈Ⅶ類〉

3拍の名詞になると、型の所属が複雑になるが、尾高型のアクセントと中高型のアクセントに特徴が見える。

尾高型のアクセントについて、例えばⅡ類「小豆」、「毛抜き」、Ⅳ類「馳」、「林」、「筵」などは、秋永一枝（1957）や小林滋子（1961）等で指摘されているとおり、東京都区部やその近郊で平板化が指摘されている語である。当方言においては古いアクセントが保持されている。「とかげ」、「くらげ」に関しては、他の地域に類例が見られず、この方言独特のアクセントの可能性はある。

中高型のアクセントが多く観察される点については日野資純（1984）などでも指摘されている通り、神奈川県方言の一つの特徴であると言える。Ⅲ類の「小麦」や「栄螺」、Ⅴ類の「油」や「心」等の中高型のアクセントは、平山輝男（1957）はじめ、東京周辺域の伝統的なアクセントとして指摘があるものである。また、「茸」「マミヤ（眉）」など、地域的特色のあるアクセントと考えられる語もある。ちなみに、神奈川県方言の特色として、中高型の「南瓜」のアクセントが知られているが、この話者からは共通語と同じ平板型のアクセントが観察された。話者は方言としては俚言の「トーナス（唐茄子）」を使用しており、語形「カボチャ」は後から学習した語であるからと考えられる。『三浦誌資料』にⅥ類「烏」は平板型と記載があるが、今調査では共通語アクセントと同じ頭高型であった。

（4）4拍名詞、多拍語など

4拍以上の語について、目立った特徴を以下に挙げる。「足音」や「雷」など、尾高型から中二高型への変化が指摘されている、いわゆる「A型B型のアクセント」については、多く尾高型のアクセントが観察された。尾高型が観察された語例を以下に示す。

4拍名詞尾高型が観察された語

足音、居眠り、金持ち、雷、缶詰、酒飲み、楽しみ、年寄り、喜び、建物（中二高型、中一高型も）、食べ物（中一高型も）

このほか、

イケッコ（池）、小魚、長袖、煮魚、半袖、毎朝、毎月（メーゲツ）、毎日、胸板のような語にも尾高型が観察された。

このほか、複合名詞について、「サケカス（酒粕）」や「ガラスマド（ガラス窓）」など、後部要素のアクセントが生かされるアクセントや、「アカトンボ（赤とんぼ）」や「ウミボーズ（海坊主）」など、前部要素の下がり目が活かされる頭高型のアクセントなど、東京および周辺域における多拍の名詞の伝統的な姿が観察された。

後部要素のアクセントが生かされる語

雨傘、唐傘、酒粕、脂汗、ガラス窓、几帳面、マツッカサ（松かさ）、にわか雨、娘婿

多拍の名詞で頭高型が観察された語

唐茄子、海坊主、陣太鼓、赤とんぼ、お月様、鬼ヶ島、ひいじいさん、ひいばあさん

地名のアクセントについて、地域独特のいわゆる「地元型」のアクセントとしては、3拍頭高型の「三浦」「三崎」、3拍中高型の「長井 [naŋeː:]」、5拍平板型の「走水（はしみず）」、尾高型の「城ヶ島」などが観察された。

5.4 動詞のアクセント

（1）語単独のアクセント

動詞は、平板型と起伏型のアクセントの対立が明確にある。2拍の語では「イク（行く）」と「カク（書く）」の2種、3拍の語では「アガル（上がる）」、「アマル（余る）」、「トース（通す）」の3種の型の対立がある。2拍、3拍の動詞のアクセントを以下に示す。

2拍名詞

平板型 行く、産む、売る、追う、置く、貸す、刈る、聞く、汲む、消す、咲く、敷く、死ぬ、知る、吸う、空く、添う、散る、突く、継ぐ、積む、釣る、飛ぶ、泣く、鳴る、塗る、抜く、乗る、張る、引く、減る、巻く、増す、揉む、止む、遣る、言う、割る、着る、シル（する）、煮る、寝る〈I類〉

起伏型 会う、編む、打つ、書く、勝つ、噛む、切る、食う、蹴る、漕ぐ、刺す、住む、

剃る（スル）、立つ、取る、縫う、脱ぐ、練る、飲む、這う、吐く、吹く（平板型も）、降る、干す、掘る、蒔く、待つ、漏る（ムル）、読む、来る、出る、見る〈Ⅱ類〉[seː]（と言う）、着く（平板型も）、付く（平板型も）〈表外〉

3拍名詞

平板型 上がる、遊ぶ [asubuu]、当たる、浮かぶ、歌う、送る、飾る、変わる [ka:ruu]、嫌う [kira:]、削る、探す、探る、沈む、進む、並ぶ、握る、運ぶ、巡る、ゆずる、明ける、植える、借りる、枯れる、消える、捨てる、染める、腫れる、負ける、燃える〈Ⅰ類〉、違う〈Ⅱ類〉、入る〈Ⅲ類〉[a:buu]（行く）、喰らう [kura:]〈表外〉

中高型 慕う（平板型も）〈Ⅰ類〉、余る、祈る、祝う、動く、移る、恨む、選ぶ、起こす、落とす、思う、乾く、崩す、砕く、曇る、縛る、叩く、頼む、包む、詰まる、照らす、懐く、悩む、習う、憎む、濁る、ひがむ、光る、許す、生きる、起きる、掛ける、覚める、建てる、付ける、溶ける、撫でる、逃げる、晴れる〈Ⅱ類〉、歩く、隠す〈Ⅲ類〉

頭高型 帰る〈Ⅱ類〉返す、通る、通す、参る [meːruu]〈表外〉

名詞同様の例外が少ない。2拍の動詞起伏型の「吹く」や「付く」は母音が無声化して「下がり目」の位置が移動することもあるが規則的ではなく、両方のアクセントが観察された。このことは3拍の「隠す」にも言えるが、この語はあまり使用されず、「カクナス」という俚言の方が主に用いられるようである。

Ⅲ類の動詞「入る」は、平山輝男・編（1960）や、秋永一枝・編（1981, 2001）等で示されているアクセントは頭高型で、活用形のアクセントも頭高型の動詞と同様になる。しかし、当方言においては、一部、起伏型（頭高型）との揺れも見られるものの、Ⅰ類（平板型）の動詞とほぼ同じアクセントが観察された。この現象は小林滋子（1961）の東京都三多摩方言や、大橋勝男（2008）の埼玉県比企郡方言や、東京都昭島市方言など、東京周辺の地域のアクセントでの報告と共通しており、いわゆる「共通語アクセント」とは異なる西関東方言の相を示している例と考えられる。

（2）活用形のアクセント

次に、各型式のアクセントに着目する。3拍の名詞を例にとり、後続する語句の拍数とアクセントの方で整理して表にまとめた（表2）。

平板型の動詞の諸形式を見ていくと、方言的特徴が複数認められる。後続する語の拍数

の順に特色を挙げる。

①当方言では伝聞の意味で「ト」が後述する「ダトヨ」とともに用いられる。この「ト」は平板型の動詞に平板につき、多くの場合、「ウントヨー（売るそうだ）、ウタートヨー（歌うそうだ）」のように文末詞「ヨ」及び「ヨー」が接続する。

②続いて、2拍の「ネー（ない。否定。）」、「テー（たい。願望。）」は。末尾の拍が長音であるため、「ヘーラネー」のように「下がり目」が来て、願望の「たい」については起伏型と区別がつかなくなることがまれに見られたが、平板型が保たれたアクセントの方が優勢で、起伏型の対立は保たれていると言える。

③「(に) イク」あるいは「(に) クル」のアクセントについては、小林滋子（1961）や田中ゆかり（2010）でも指摘がある、東京周辺に残る伝統的なアクセントの例だが、当方言でも、いわゆる尾高型、動詞連用形の末尾に「下がり目」が観察された。なお、助詞「に」は、調査時に「に」が接続した形式を示したが、「に」が脱落した形式が観察されたため、表には助詞が脱落した形式を採用した。

④準体格の「の」が接続するとき、「下がり目」は「の」の後に来る。坂本薫（2014, 2017）で述べたが、このアクセントは神奈川県小田原市や中郡二宮町方言の老年層にも観察されており、県内方言の1つの特徴と言える。

⑤推量の「ダロー」は、後続する「ダロー」の「下がり目」が生かされるアクセントが観察された。中郡二宮町方言において、「ダロー」が接続した形式のアクセントに年代差が見られることを坂本薫（2017）で述べた。具体的にいうと、上記のアクセントは伝統的な相を示しており、年代が下ると「下がり目」は1拍前に移動し、「イクダロー」のように発音される。ちなみに、推量の意で用いる「ラシー」は、古くは「ダロー」と同じ振る舞いをする語であったと言われるが、こちらは、動詞の型を問わず、後続する「ラシー」の「下がり目」が生かされるアクセントであった。

⑥推量の意で用いる「ダンベ」も、平板型の動詞に接続する際は、高く平らに続いて、後続する「ダンベ」のアクセントが生かされる。

⑦過去の否定表現「ナカッタ」が接続した形式のアクセントは、共通語のアクセントと、「下がり目」を1拍交替させたアクセントとの間で揺れが生じていた。下降の位置は異なるが、起伏型（中高型）でも、2つのアクセントで揺れが生じていた。

起伏型の動詞は動詞の中にアクセントの下がり目に従って下降するものが多く、平板型の動詞よりも特徴が表れにくいだが、以下に示す、⑧「ヤガレ / ヤーガレ」に特徴が観察された。

⑧「ヤガレ / ヤーガレ」は起伏型の動詞に接続する際、元来は他の語と同様、前接の動

詞のアクセントが生かされるものだが、時代が下るにつれて後続の語のアクセント（ヤガレもしくはヤガレ）が生かようになったと言われている（秋永一枝1967）。今調査の結果では、東京語の伝統相と共通する、動詞の「下がり目」が生かされるアクセントが観察された。

表2：三浦市方言老年層話者 動詞の活用形のアクセント

後続形式の拍数	後続形式 語例	遊ぶ (3拍・Ⅰ類)	※入る (3拍・Ⅲ類)	選ぶ (3拍・Ⅱ類)	帰る (3拍・Ⅱ類)
0	終止形 命令形	アスブ アスベ	ヘール ヘーレ	エラ`ブ エラ`ベ	ケ`ール ケ`ーレ
1	タ テ	アスンダ アスンデ	ヘーッタ ヘーッテ	エラ`ンダ エラ`ンデ	ケ`ーッタ ケ`ーッテ
	ナ・禁止	アスブ`ナ	ヘ`ーンナ	エラ`ブナ	ケ`ーンナ
	バ・假定	アスベ`バ	ヘーレ`バ	エラ`ベバ	ケ`ーレバ
2	コト・事	アスブコト	ヘーンコト	エラ`ブコト	ケ`ーンコト
	レル・受身、 尊敬 セル・使役 タイ・願望	アスバイル アスバセル アスビテー	ヘーライル ヘーラセル ヘーリテー (ヘーリテーも)	エラバイ`ル (エラバ`イルも) エラバセ`ル エラビテ`ー	ケーライ`ル (ケーラ`イルも) ケーラセ`ル ケーリテ`ー
	ナイ・打消	アスパネー	ヘーラネー (ヘーラ`ネー、 ヘーラネ`ーも)	エラバ`ネー	ケ`ーンネー (ケーラ`ネーも)
	シニ行ク	アスビ`イク	ヘーリ`イク	エラ`ビイク	(ケ`ーリイク) ³
	準体助詞＋ガ	アスブノ`ガ (アスブ`ノガとも)	ヘーンノ`ガ (ヘール`ノガも)	エラ`ブノガ	ケ`ーンノガ
	ヤー・假定	アスビヤ`ー	ヘーリヤ	エラ`ビヤー	ケ`ーリヤ
	ベ`ー・意 思・ 勧誘 マス	アスプベ`ー アスビマ`ス	ヘーンベ`ー ヘーリマ`ス	エラプベ`ー エラビマ`ス	ケーンベ`ー ケーリマ`ス
3	ソーダ・様態 ナガラ・付帯 状況	アスピソーダ アスピナガラ	ヘーリソーダ ヘーリナガラ	エラピソ`ーダ エラピナ`ガラ	ケーリソ`ーダ ケーリナ`ガラ
	ダロー・推量 トヨー・伝聞	アスプダロ`ー アスプトヨ`ー	ヘーンドロ`ー ヘーントヨ`ー	エラ`プダロー エラ`プトヨー	ケ`ーンドロー ケ`ーントヨー
	ラシー・推量	アスブラシ`ー	ヘーンラシ`ー	エラブラシ`ー	ケーンラシ`ー
	セー・指示	アスバッセ`ー	ヘーラッセ`ー	エラバッセ`ー	ケーラッセ`ー
	ベヨー・勧誘	アスプベヨ`ー	ヘーンベヨ`ー	エラプベ`ヨー	ケーンベ`ヨー

	ダンベ・推量 ダトヨ・伝聞 方ガ ヤガレ	アスプダ`ンベ アスプダ`トヨ アスプホ`ーガ アスビヤ`ガレ (アスビヤ`ガレとも)	ヘーンダ`ンベ ヘーンダ`トヨ ヘールホ`ーガ ヘーリヤ`ガレ (ヘーリヤ`ガレも)	エラ`プダンベ エラ`プダトヨ エラ`プホーガ エラ`ビヤガレ (エラビヤガレも)	ケ`ーンダンベ ケ`ーンダトヨ ケ`ーンホーガ ケ`ーリヤガレ
4	ナカッタ	アスバナカ`ッタ (アスバナ`カッタも)	ヘーンナカ`ッタ (ヘーンナ`カッタも)	エラバナ`カッタ (エラバナカッタも)	ケ`ーンナカッタ
	サンナ・禁止	アスバッサ`ンナ	ヘーラッサ`ンナ	エラバッサ`ンナ	ケーラッサ`ンナ

(3) 複合動詞のアクセント

前部要素が起伏型の動詞もしくは接辞的な語である4拍～7拍の複合動詞210語について調査を行った。調査語は、主に終止形と「た」が接続した形式について、一部の語については先に示した表にある項目について調査した。4拍の語と5拍の語で、優勢なアクセントの型に傾向がみられた。4拍語の多くは「アミダス / アミダス・アミダシタ / アミダシタ (編み出す・編み出した)」のように平板型か、末尾の2拍前に下がり目のあるアクセントの両方を用いるという意識で、実際両様のアクセントが観察されたが、5拍の語では平板型のアクセントの方が優勢であった。6拍以上の語は調査語数が少なく傾向が表れなかった。最も古いアクセントと考えられる、前部要素のアクセントが生かされる語例を以下に挙げる。

①前部要素が2拍かつ接辞的な語

[ka`pporuu] (放る)、[ka`ttfibaruu] (縛る)、かつ飛ばす、かつばらう、ぶん殴る、ぶっ殺す、ぶっ壊す

②前部要素が2拍動詞

食い荒らす、こき使う、食いつぶす、切り落とす、蹴倒す [ke`ttabosuu]、吹き飛ばす [ɸuu`ttobasuu]、こき下ろす、取り払う [to`ppara:]、待ち構える [ma`tfikame:ruu]、飲みつぶれる、取り繕う、酔いつぶれる、凝り固まる

③前部要素が3拍動詞

かじりつく、食らいつく、しがみ付く、怒鳴りこむ、殴りこむ、思い切る、思い知る、小突き回す、拌み倒す、走り回る [hafi`rima:ruu]、泳ぎ回る [ojo`njima:ruu]、押さえつける、作り直す、思い浮かべる

④前部要素の「下がり目」が移動した語

駆け回る [ka`kema:ruu]、跳ね回る [ha`nema:ruu]

5.5 形容詞のアクセント

伝統相を多く残す名詞、動詞とくらべると、形容詞のアクセントの実態には変化の兆候が観察された。2～3拍の形容詞の終止形単独のアクセントを以下に挙げる。2拍の形容詞は起伏型のみで、3拍の形容詞は、平板型から起伏型への統合が進んでいる。坂本薫（2017）でも述べたが、平板型を保っている語はいずれも語末の連母音の融合が生じていない。連母音の融合と、起伏型への統合は関連がある可能性がある。

- | | | |
|-----------|------------|--|
| (1) 2拍形容詞 | 起伏型 | 無い [neːː], 良い [iːː] |
| (2) 3拍形容詞 | 平板型 | 薄い、軽い、遠い ([toeːː, toiːː] とも) |
| | 起伏型 (中高型) | 荒い [areːː], 甘い [ameːː] 〈I類〉 |
| | | 熱い、黒い [kuureːː], 白い [fireːː], 高い [takeːː], |
| | | 近い [tʃikeːː], 強い [tʃueːː], 長い [naneːː], |
| | | 早い [haeːː], 低い、深い [ɸuukeːː], 古い、弱 |
| | | い [joeːː] 〈II類〉 |
| | | 濃い [koiːː], 眠い [neburːi] 〈表外〉 |
| | 起伏型 (頭高型) | 多い ([oeːː, oiːː] とも) |
| | 平板型と中高型で揺れ | 赤い [akeːː~akeːː], 浅い [aseːː~aseːː], 暗い [kuureːː~kuureːː], 厚い、遅い [oseːː~oseːː], 固い [kateːː~kateːː] 〈I類〉 |

終止形単独と比べると、活用形のアクセントでは平板型と起伏型の対立は保たれているが、それぞれの型で揺れを生じている箇所がある。まず、古相保持の点を挙げると、平板型の～カッタ、ケレバのアクセントについては、共通語的な中一高型とともに、金田一春彦（1941）で指摘されている古いアクセントである中二高型とが観察された。一方、起伏型へ向かった変化とみられる特徴としては、平板の動詞では高く平らに続いた準体助詞「の」や、伝聞の「と」が接続した形式で、「下がり目」が生じていた。

起伏式で問題になるのが、「～ク、～カッタ、ケレバ」の頭高型から中一高型への移行で、本調査でも両方のアクセントが観察された。「～クナル、クナイ」坂本薫（2017）で述べた中三高型については、違和感はないが使わないという意識であった。

表3：三浦市方言老年層話者 形容詞の活用形のアクセント

後続形式の 拍数	後続形式 語例	浅い (3拍・Ⅰ類)	高い (3拍・Ⅱ類)
	終止形	アセー	タケ゛ー
0	終止形	アセー	タケ゛ー
1	ヨ カ・疑問 ～ダ・断定 ～テ ～タ ～バ・仮定 ～キャ・仮定	アセーヨ アセ゛ーカ アセ゛ーダ アサ゛クテ アサカ゛ッタ (アサ゛カッタとも) アサケ゛レバ (アサ゛ケレバとも) アサ゛キャ	タケ゛ーヨ タケ゛ーカ タケ゛ーダ タ゛カクテ (タカ゛クテとも) タ゛カカッタ (タカ゛カッタとも) タ゛カケレバ (タカ゛ケレバとも) タ゛カキャ
2	コト・事 デス カラ ジェン・反語 ノガ・準体助詞＋ガ ッテ ネー・打消 カネー・～くはない ～ナル ベー・推量	アセーコト アサ゛イデス アセ゛ーカラ アセ゛ージェン アセ゛ーノガ アサ゛クッテ アサクネ゛ー アサ゛カネー アサクナ゛ル アサカンベ゛ー	タケ゛ーコト タカ゛イデス タケ゛ーカラ タケ゛ージェン タケ゛ーノガ タ゛カクッテ (タカ゛クッテとも) タ゛カクネー (タカ゛クネーとも) タ゛カカネー (タカ゛カネーとも) タ゛カクナル (タカ゛クナルとも) タカカンベ゛ー
3	ソーダ・様態 トヨー・伝聞 ラシー・推量	アサソーダ アセ゛ートヨー アセーラシ゛ー	タカソ゛ーダ タケ゛ートヨー タケーラシ゛ー

6. 結論と今後の課題

以上、三浦市で生育した老年層話者のアクセントについてその体系と特徴について述べた。形容詞は起伏型への統合や、新しいアクセントの型との間での揺れが見られるなど、変化が目立つ結果となった。しかし、名詞と動詞のアクセントからは、東京や西関東方言の古相とも繋がる、伝統的な方言的特徴が多く保持されていることが明らかになった。

今後の展望として、同地点及び周辺の地域は、本稿で示した話者のように、伝統的なアクセントの体系を保持している話者が多く生活していること、また、男女差や市内（半島内）における地域差もあることが予想される。今後、複数の話者を対象に調査を継続することを考えている。

また、本稿では示しきれなかった俚言や、表現形式が多く観察されている。また、アクセントだけでなく、音韻的特徴についてもより詳細な調査が必要である。さらに、文法的な特徴や、語彙の調査など、市内の包括的な方言調査を行っていくことも今後の課題である。

また、話者によると、伝統的な方言で会話ができるのは、現在（2017年）の70代後半以上の年齢であるという意識がある（若い人と話す時は共通語を用いるという意識もある）。方言がどのように継承されているか、年代差について調査することも課題であるが、それよりもまず、伝統方言の話者の高齢化が懸案となってくる。老年層話者を対象とした調査が急がれる。

謝辞

話者については、三浦市教育委員会のご協力を賜り、紹介していただいた。ここに感謝の念を申し上げたい。

注

- 1 音声の表記は片仮名と一部 IPA を用いた。アクセントの表し方は「下がり目」を記号「˘」で示す方法と、高い拍を太字で示す方法を用いている。以降のページも同様。
- 2 発音をカタカナで表記する際、高い拍をゴシック体、低い拍を明朝体で示した。
- 3 使用する場面が難しい語形であるため、「もし「行く」が接続したらどうなりますか」と質問して発音してもらった。

参考文献

- 秋永一枝（1957）「アクセント推移の要因について」『国語学』31集 国語学会
- 秋永一枝（1967）「江戸アクセントから東京アクセントへ」『国語と国文学』44巻4号（秋永一枝, 1999『東京弁アクセントの変容』所収）
- 秋永一枝（1981）「アクセント習得法則」『明解日本語アクセント辞典』第2版 金田一春彦監修 三省

堂

- 秋永一枝 (2001) 「東京アクセント習得法則」 金田一春彦監修『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
- 金田一春彦 (1941) 「東京語アクセントの再検討 (一)」『国語教育誌』4 巻 7 号 (井上史雄ほか監『関東方言考』3 日本列島方言叢書 ゆまに書房所収)
- 小林滋子 (1961) 「三多摩方言アクセントの推移」『国語学』46 集 国語学会
- 坂本 薫 (2014) 「小田原市方言アクセントの古相について」『首都圏の言語の実態と動向に関する研究成果報告書 一首都圏言語研究の視野一』国立国語研究所共同研究報告
- 坂本 薫 (2016) 「神奈川県中郡二宮町方言のアクセントーアクセントの体系と名詞・動詞・形容詞のアクセントー」『國學院大學大学院紀要』
- 坂本 薫 (2017) 「神奈川県三浦市方言にみられる音声、音韻の特徴」第335回日本音声学会研究例会発表資料
- 佐々木英樹 (1984) 「三浦半島言語地図」第一分冊『駒沢女子短期大学紀要』32
- 東條 操 (1954) 『日本方言学』吉川弘文館
- 日野資純編 (1951) 『神奈川県未刊方言資料 (一)』ひでばち叢書第2 集 ひでばち民俗談話会
- 日野資純 (1952) 「相模方言の素描 (その方言区画)」『国語学』9 集 武蔵野書院
- 日野資純 (1964) 「神奈川県の方言区画」『日本の方言区画』日本方言研究会編 東京堂
- 日野資純 (1984) 「アクセント研究に対する一つの提言 (アクセント類別語彙未登載語のアクセントと方言研究)」『音声学会会報』
- 日野資純 (1992) 「神奈川県方言」平山輝男ほか編『現代日本語方言大辞典』1 巻 明治書院
- 平山輝男 (1957) 「東京都西多摩郡奥多摩町小河内方言の調査」『日本語音調の研究』明治書院
- 平山輝男編 (1960) 『全国アクセント辞典』東京堂
- 山本靖民 (1933) 「神奈川県方言資料」『方言』4 月号 日本方言学会